

表題：瑞穂町協働フォーラム2016 概要

目的

瑞穂町では、平成26年10月8日に「瑞穂町協働宣言」を策定し、協働の理念を広く町民に周知するため、さらには、一人でも多くの方にまちづくりに関心を持っていただきたく、フォーラムを開催します。

フォーラムテーマ

「未来の瑞穂町をわたしたちがつくる」～こんな瑞穂町をわたしはつくりたい！～

主催

瑞穂町・瑞穂町協働のまちづくり推進委員会

日時・場所

平成28年3月20日（日曜日） 午前10時～午後1時
瑞穂町民会館ホール

出席者数

	参加人数
一般参加者	50人
瑞穂町協働のまちづくり推進委員	8人
事務局（部課長含む）	6人
合計	64人

配付資料

<フォーラム当日資料>

- 1 「瑞穂町協働フォーラム2016」ちらし
- 2 Aチーム：大正琴歌詞カード
- 3 Bチーム：レジュメ
- 4 基調講演レジュメ
- 5 「瑞穂町協働フォーラム2016」アンケート

<各種お知らせ、ちらし等>

- 6 「自立と協働のまちづくりの実現に向けて」（地域課）
- 7 「町内会・自治会に加入しませんか」（地域課）
- 8 「メール配信サービスにご登録を」（秘書広報課、地域課）
- 9 「防災無線の電話応答サービス」（地域課）
- 10 「大人のための絵本の読み聞かせパートⅡ」（ボランティアセンターみずほ）
- 11 「日本一のジャンボボケ」（環境課）
- 12 「さやま花多来里の郷」（建設課）

当日の流れ

- 1 開会
司会進行 島崎亜紀子氏

- 2 開会挨拶
瑞穂町協働のまちづくり推進委員会委員長 加戸 佐織

- 3 基調講演
演題「協働のまちづくりに取り組むために」
講師 辻山 幸宣講師 (公益財団法人) 地方自治総合研究所所長
中央大学大学院公共政策研究科客員教授

- 4 協働事例発表
Aチーム演題「サロン活動で笑顔の瑞穂町を」 発表者 野本 多恵子
Bチーム演題「みんなで楽しむ平地林づくり」 発表者 中沢 清

- 5 講評

- 6 分科会 (情報交換)
各ブースでの展示物紹介及び活動についての質問を受け付ける

開会挨拶及び基調講演

(司会・島崎) それでは、10時になりましたので、只今から瑞穂町協働フォーラム2016を開催いたします。本日は公私ともご多用のところ、このフォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、わたくしは、瑞穂町協働のまちづくり推進委員の島崎でございます。よろしくお願いたします。本日のフォーラムは、瑞穂町協働のまちづくり推進委員会と町との協働事業で開催しております。



今回のフォーラムの内容を簡単にご説明します。お手持ちのちらしをご覧ください。はじめに、基調講演、次に推進委員の分科会による協働事例発表となっております。最後に、総評をいただき、その後はホール後方に協働事例のブースを設置してありますので、お時間のある方は、ぜひお立ち寄りください。それではフォーラム開催に先立ちまして、開会挨拶を瑞穂町協働のまちづくり推進委員会加戸委員長よりお願いいたします。

〈開会挨拶〉

(加戸委員長) おはようございます。本日はお忙しい中、瑞穂町協働フォーラム2016にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。瑞穂町協働のまちづくり推進委員会委員長の加戸佐織です。平成25年5月にスタートした瑞穂町の協働を考える会議は27年3月に延べ22回で終了し、その間平成26年10月には瑞穂町協働宣言を策定し、平成27年3月には、瑞穂町協働宣言の実現に向けた提言書を町長に提出いたしました。同年4月から瑞穂町協働のまちづくり推進委員会が始まりました。私は3年にわたり委員を務めさせていただきましたが、「協働」を説明するのは大変難しいと思っています。ですから、協働のまちづくりを考えると、協働宣言の中の一文を思い出してほしいと思います。



「未来に向け瑞穂町を育てていくためにも、私たちはみんなで考え、汗を流し、それぞれができることを分かち合い、ひとつになることで、協働のまちづくりを実現します」

ちょっと長いので覚えられませんが、「未来の瑞穂町をわたしたちがつくる」と覚えてみてください。わたしたちというのは、瑞穂で暮らす人、働く人、学ぶ人といった、瑞穂に関わるすべての人、この会場にお越しくくださった皆さんが未来の瑞穂町をつくると思ってくださることが、協働のまちづくりにつながっていくのだと思います。

今日は、委員がA・Bのふたつのチームにわかれ、こんな瑞穂町をつくりたいなと思っている事、Aチーム「サロン活動で笑顔の瑞穂町を」Bチーム「みんなで楽しむ平地林づくり」の事例発表をさせていただきます。今日のフォーラムを機に、こんな瑞穂町をつくりたいなという気持ちを大切にしながら、未来の瑞穂町を考えてみてください。

ご挨拶の最後になりましたが、協働を考える会議のスタート当初から様々なアドバイスをいただいた辻山先生、並びに、瑞穂町住民部地域課地域係の職員の皆様に心より感謝申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。

(司会・島崎) ありがとうございます。続きまして、基調講演に移りたいと思いますが、はじめに講師のご紹介をいたします。本日の講師は、地方自治総合研究所所長であり、中央

つじやまたかのぶ
大学大学院公共政策研究科客員教授の 辻山 幸宣 講師です。辻山講師は平成24年度の冬から瑞穂町の協働施策推進アドバイザーとして委嘱され、平成26年10月8日に発表しました、瑞穂町協働宣言の策定にあたり適切な助言等で、ご尽力をいただきました。

現在も引き続き、アドバイザーをお願いしております、町の住民組織からなる瑞穂町協働のまちづくり推進委員会においても、協働宣言の理念を実現させるために具体的な施策等についてアドバイスをいただいております。

本日の講演は「協働のまちづくりに取り組むために」ということですが、協働とは何か、また、協働のまちづくりについて考える良い機会であるかと思います。それでは約50分間の講演となりますけども、辻山講師、よろしく願いいたします。

<基調講演>

(辻山講師) みなさん、おはようございます。一番前に座っていたので、わからなかったですけど、こんなにたくさんの方、よくおいでくださいましたね。どう考えても、協働のまちづくりってなんだい、協働って第一、漢字にすると「共同」「協同」「協働」と、いくつもあ



って、それぞれどう違うのかを考えておかないと、下手をすると、他の地域でも見られることですが、行政の都合でうまく住民を使ってしまい、それが協働だとしているケースが出てきています。そういうふうにして使われてしまった住民たちは、やがて協働疲れといって、すっかりくたびれちゃった、という話を聞きますね。そのためには、私たちはここに掲げられている「協働」をどういうふうに理解し、それを行政当局と共有して、お互いにわかり合わなければ、進んでい

かないので、協働ということを理解するために、いくつかのことを申し上げたいと思っています。

それでは早速、みなさんに申し上げたいんですけど、一般には地方自治体、例えばここで言うと瑞穂町、役場があって行政と議会があって、そういう自治政府というものですね、この自治体というのは、どのようにしてできたかご存知ですか。実はですね、歴史を振り返ってみると、その地域を治める自治政府は、そこに住んでいる人たちが作ったというふうに考えられます。そして、お金を出して、様々なことをやってもらう。例えば、道路を舗装したり、川を浚渫したり、峠道を開いたり、そういうことをやってもらった、そのために住民たちが共同でつくった。そのことを話しますと、どういう単位で作ったかという、住んでいるところを集落といい、100年ぐらい前のことになりますけども、明治7年の統計では、83,000ぐらいあったそうです、現在、市町村は1,700ぐらいしかないんですけどね。83,000もあったのに、どうしてこんなに少なくなったかという、消えたわけじゃないんです、合併して、くっつけていって小さくなったんですけど。最初は、暮らしている単位、何かで線引きしたわけでもなく、生活の形で決まっていたと言われていました。ここでは、自分たちで治めていたんですね、そのために3つのことが必要だったと言われていました。共同作業、相互扶助、家族の協力、この3つで成り立っていたと言われていました。

確認していきましょう、協働とは違う文字なんですけど、共同というのは、みんなで力を合わせて物事を作っていく、「協働」とは微妙に違うんですね。さて、そこで、雨が降って道がぬかるんだら、農作業が困りますから、砂利を川からあげてきたりして、砂利を道に敷いたり、道普請をしなきゃいけない。今だったら、おそらく町役場の土木課が登場してやるでしょうけど、当時はそんなものありませんので、みんなで出ていって、共同作業を行うようになります。嫌な話かもしれませんが、住んでいる人にとっては義務と考えられています。労働力を村のために提供するというのは、住んでいる人の義務なんです。私が色々調べた中で、驚いたのは、新潟の地震があったときに、孤立した村がありましたよね、孤立して空からしか行けなくなったんですけど、実は調べてみると、その後発見されたんですけど、村へ通じる水道、トンネルがあったそうです。人々が共同作業で掘って行ってトンネルを作った、これも共同作業の典型的なわけであります。このようにして、生活の基盤を自分たちで維持し管理していた。

これが1点目ですね、2点目は、今でも使う言葉ですね、「相互扶助」。わかりやすいのは、冠婚葬祭とか、そういうのが起きた時、みんなで協力して、お葬式を出したり、それから形として残っているのは、家の建て替えというような作業はお互い様ですので、手伝いに来てくれた人には、今度は手伝いに行ったりしていました。あるいは、芳名帳というのはご存知ですか、結婚式とか行った時に管理するもので、来てくれた人の名簿なんですけど、何のためにしているのかを聞きますと、自分の親族の時に来てくれたりすると、出かけていくんですね。そのような関係で使われたものだと思います。このようにして相互扶助というのが成り立っている。かつて、NHKスペシャルで白川郷の屋根ふき、80年ぶりに「結い」という相互扶助でやった、つまり村人たちはみんな出てきて、力を貸して屋根をふき替えてしまう、と言われていました。相互扶助とはそういうものだと考えてください。

3番目の「家族の協力」はわかりますよね。若い夫婦に子どもが産まれたら、農作業に差支えますので、おじいさんとおばあさんが家でみているという関係、そして若い夫婦は畑に出て農作業ができる、このようにして家族の協力で成り立っていた。そのおじいさんおばあさんの体が弱ってきたら、夫婦と孫も含めて、死ぬまで面倒をみるという関係で成り立っていた。

この3つがお互いに作用することによって、集落の自治は成り立っていた。故に、藩のお殿様は、この集落の運営に対して、ほとんど力を出せなかった。自分たちで運営していたと言われています。その時に、雨が降ってきたら、みんなで集まって相談し、いつ道を舗装するか、人手はどれくらい必要か等を話し合う場所として寄合という組織を作っていたんですね。そして、ここで相談して、雨が上がって翌日の朝6時からやろうとなった時に、一軒から作業で男手1人、それから女手1人出してもらってお昼の準備をするという決定を寄合でやっていた。これが、いわゆる明治の半ばくらいまで続いていたと言われていますが、やがて、日本が近代に突入すると、特徴的なのは資本主義が採用されたことです。ということは、労働力をお金にかえるということが出来る世界になってしまった。そうすると、寄合でみんなで集まって、共同作業でやっていたことに、会社の都合で出られない人がでてきて、共同作業に支障が出始めるんです。最初のうちは、来られない人から出不足金というものを徴収して、作業の経費に充てていたが、やがてどんどん欠席者が増えていき、まさに近代が進行している。そうすると、共同作業が成り立たなくなります。ですので、寄合がみんなで集まって相談したところ、みんなからお金を集めて、人を雇おうとします、当時、明治時代ではこれを雇員・傭人と呼んでいたんですね。これが今の雇用という言葉になっていますね。雇員・傭人という人を雇って、この人たちに共同作業で出来なくなった部分を頼もうと決めたんですね。したがって、寄合は基本的に全員参加なんですけども、共同作業をさぼる人がでてくる時代ですから、当然寄合も全員参加は無理ですよね。そこで、5軒から1人とか、10軒から1人から出ればいいじゃないかとし、一種の選挙のようなものが行われることとなります。そうすると、議会というのに近づいてきます。そして、ここで雇った人たちが行政の形をつくっているんですね。このように私たちの先祖は近代に入って、それまで1000年以上続いてきた統治構造が維持できなくなったことが、政府自治制を構成したと言われています。このことを分かっておいてほしいんですね、つまり、住んでいる人たちが政府を樹立したということなんです。

世の中が進んでいくと、処理しなければいけないテーマがどんどん増えますよね、これが行政需要の多様化・拡大となります。かつては丸太の橋を渡していたけれど、やがてオートバイとかが出てきた時には、ちゃんとした橋にしないといけないとか、道路を舗装道路にしよう、地下に下水道を作ろうとか、様々なことが増えてきて、政府の活動が大きくなっていきます。やがて、外国との日清、日露戦争などを経て、政府が地域、国を守る役割を担っていく。隅から隅まで政府の目が行き届き、政府が解決してくれた、人々は政府にお願いをし、時には強く要求することによって、それが実現していく社会を生み出している。その時に政府がやったことは、明治4年には府県制といって府・県ができていて、大名たちを辞めてもらって、府・県知事になってもらっているわけです。それと合わせて、この国全体の責任を

負っていかなければならない、かつては江戸幕府の将軍は鹿児島県で何か問題が発生しても、関与せずに済んだわけで、江戸幕府にしたら別の国のようなものでした。ところが、明治維新で全国をひとつの政府がみるようになってしまった、それを維持管理していくための組織として、府や県がまずできて、この時は、3府72県ぐらいありました。これだけあると統治するのが難しいということで、さらに現在の47県体制に分割したんですね。その下に市町村とし、15,000にまでまとめたのが明治21年のことです。それから私たちは、100年ぐらい同じ体制でやっていきます。政府としての一体感、また、国から命じられたことはやるという委任事務の構造を作るんです。国会で決めて、県にやらせるか市町村にやらせるかを決め、法律にしてしまいます。この体制にすると、住民たちが市町村の政治家に働きかけ、そしてその上の県レベルの政治家に働きかけ、国会に働きかけ、実施政策化していくような仕組みになっていて、100年近くやってきたんです。生活はどんどん変わり、要求も増えていく、そうすると予算が大きくなり、その結果が約1000兆円という驚くべき借金になっているわけです。そうやって、私たちの国は2000年にある決断をしました。地方の事を国にもってくるなということをやろうとしたんですね。高度成長期の限界を迎え、政府の運営が行き詰まった時に、地方分権改革というのをやって、その時のスローガンは「地域のことは地域で」こんな簡単なことが、なんと100年以上かかって出てきたんですね。国から地方に紐付きで流れる指令とお金についての対策を行った。これを地方分権改革といいます。このようにして、なんでもやる、隅から隅まで目を配って、国民のために働く政府に限界がやってきて、地域のことは地域でやってとなり、それを引き受けた地域も、また小さな政府でありますので限界があります。お金の限界、職員の限界で職員数を抑えなければいけない事態になっている、そうすると、これまでやれてきている事を含めて、さらにこれから新しく発生するであろう様々な行政事業に対して全てに対応することができなくなった。協働の出所は、政府の時代と言われた、政府が万能でやってきた時代の終わりを告げているということになるんですね。その時に、「地域のことは地域で」と切り捨てられた。では、地域でどうするかこれから私たちは真剣に考えていかなければならないという状況になった。

そこで登場してきたのが、鳩山由紀夫さんが総理大臣になった最初の所信表明演説で言った、「新しい公共」という言葉です。彼はこう言ったんですね、公共的なものが全て国というような組織に委ねられるわけではない、地域において活動されている方々、そして地域で悩んでいる方たちが手を携えて、まず解決の道を探す。単純に言えば、かつて高齢者の独り住まい世帯をどうしようかと考えていた主婦の方たちが集まって、給食を作ってお届けしたらどうかと思いき、配食サービスのようなものができた。20年以上前の話ですけど、そういう動きが地域を支え、政府は何をやるかと言うと、それらを支援する。学問的には、支援国家という、私に言わせれば、支援しからないのかという感じで、ちょっと逃げた感じがしますよね。確かに、新しい公共は住民たちが担うんだ、国家または政府はそれを支援するんだと言っていますが、私には逃げているようにも思えます。問題は、逃げていると言われたい関係をどう作るかと言うと、模索していかなければいけないんですけど。実は、その答えを見つけるに至らずに、政権が倒れてしまってますね、今は新しい公共は掛け声だけになってしまって、中身を各地で作っている事態になってきている。

さて、そうすると、地域のことを地域で考え、地域で解決し、地域で責任をもつ、これらはどうやったら可能になるのか。それは、住民が自治する地域を目指していかない限り、再び政府に頑張ってもらわなければならない、ということになります。ところが、すでに政府は3つの資源において限界がきています、政府の資源といたら「金」「人間」「権限」です、つまり財政的な資源があって、困っている所にお金をつけることで救うことができた。例えば、生活に貧している人たちに生活の扶助費を出してあげることによって生活を維持する。ぬかるんでいる道を1日かけて共同作業でやるよりか、予算をつけて道路工事をやってしまう。2番目の資源は人材です、言ってみれば政府で働く職員たち。お金がなくても、その現地に派遣することによって、解決することはいくつもあります。現場に出向き、自分も汗を流して物事を解決するという職員たちの力。これも自治体の資源となります。3番目は権限です。議会が条例を作って、例えば最近で流行っているのはごみ屋敷禁止条例とかですね、つまり、こういうことをしてはいけませんよ、もしやるなら罰しますよという権力で、強制力をもって地域を治めるという役割。この3つの資源が、今いずれも危機に瀕しています。瑞穂町はさほど大きな財政危機には陥っているとは聞いておりませんが、全国の自治体は財政の面において、行き詰まっています。それゆえ、職員をたくさん雇うわけにはいかないので、職員の定数を抑えるようになっていきます。そうすると、人の力で解決するというような手法を取ることができなくなっています。3番目の権限をもって、増税などによって、強制的に町づくりに従わせるとでも言いましょうか。このようなやり方では、近年はなかなかうまくいっていません。例えば、荒川区では、犬猫餌やり禁止条例とあって犬猫に餌をやったら罰金を取りますというのを作りました。いくら権力だからといって、そこに住んでいる住民を無理やり従わせるということの難しさがあって、最近では、こういう権力的な条例をだんだん作らなくなってきました。

そういう意味では、先程申しました3つの資源が限界にきているんです。その中で、町を維持していくというテーマにどう取り組んでいくか、その答えが「協働」なんです。そこでこの協働を考えてみると、100年前に戻ったんです、もともと自分たちで作った自治政府が地域を治めていた、そして今地域を治める力が政府において低下してきている中で、私たちにできることはやりましょう、というよりはむしろ、私たちがするという人たちが立ち上がるという意識が必要になってきている。ちなみに言いますと、この国の中央政府は協働について、「住民にできることは住民へ」と言っています。できることは住民にやらせろという意味で使っているようで、私は非常に反発しています。できるかどうかは誰が判断するんですか。だから私は、「住民がすると言ったら協働へ」。すると言ったら、行政も一緒に考えますよ、手を差し伸べますよ、ということがあってもいい。そして協働というのが成り立つ。理屈っぽいことを言いますが、最初の共同と協働の違いは、前者にはある種の義務が伴いますと言いましたよね。今年の1月に雪が降って、私の自治会は通り抜け道路がないので、大型の除雪車が入ってきて除雪するというのは期待できないものですから、自分たちで除雪することにしています。大体8時すぎぐらいから、音がし始めるので、私たち夫婦で務めを休み、出ていくんです。でも、出ていかないとどうなるかということ、おそらく周辺の方がやってくれるんだろうというふうには思っています。地域で一緒に暮らすというのは、共同的

な義務があるんだなと感じたところでございます。

この「協働」はアメリカからきた言葉なんですけど、co-production といって、お互いに力を出し合って、あることを生み出していく、あるいは解決していくというような意味なんです。それを漢字にあてたんです。声を掛け合って、一緒にやりましょうと言った人たちが、地域にとって必要な価値を生み出す、そういうことを考えていただきたい。ですから私は、このテーマについて瑞穂町の職員の方たちにも講演をしたことがあります、その時に繰り返し言ったのは、一緒にやりましょうねと、声をかけるのは行政側ではありませんと言っています。住民の方たちが声を掛けあって、やろうとなり、行政に対して協働をしたいという提案、つまり自分たちがまず動き始めて、そして行政に対して提案する、この提案の中には例えば、人材であったり、場合によっては活動の資金を援助してくれないかということもあるかもしれません。様々なものがありますが、そのようにして協働というものは、住民側からの initiative（率先して）で動くものです。そうでなければ委託事業になってしまいます、委託されたほうは、結構義務的になってしまって、辛いものがあります。ちなみに私がこれまで、学生たちに調べさせて、協働みたいなことをやっているのを報告させたものを紹介しますね。

東奥沢公園という公園が世田谷区にありまして、区はそこに体育館を作り温水プールを作ろうと、地元へ提案した。そうしたら地元の人たちが、大反対をして、その時にとった世田谷区の判断は、どのようにこの公園を使ったら良いか皆さんで検討してくださいと言って、預けて帰ったんですね。そして、そこの連合町会とかで話し合ったんでしょうね、そしたら、今のままでいいと。今のままというのは、1年中ねこじゃらしが生えているだけです、その代わりに彼らが提案したのは、入口に公衆トイレを作ってほしいということだけで、公園の管理は私たちが引き受けますよとし、タイアップすることに決めた。今でも、ねこじゃらし公園というのは結構有名で、ネットで調べても必ず出てきます。

それと私の住んでいる近くで、多摩ニュータウンを作った時に空き地が出来たらしいんですね、そこに次々にごみが捨てられる。大きいごみや家庭ごみがどんどん捨てられていって、市役所が業者に頼んで、それを撤去するためにトラックを連ねて出動したんですね。その時もまた、住民たちと言い争いになり、住民たちの主張は次のようでした。今、それをもっていって綺麗になるだろうけど、少し経ったら、またごみが来るだけだよと言って、そんなことをいつまでもやるのかと言われ、その場でごみを持っていくのはいいけど、その後についてちゃんと話し合いをしようとなり、住民たちが集まって話し合って、使用权を市から譲り受けて、そこに公園を作ったんです。いくつかの区画に分けて、1年中、花が咲いているような公園をつくらうというので、小学校の子どもたちのスペース、町会のスペース、というように分担して花畑にしました。市は土地使用权を与え、住民たちは花を絶やさない空間を作っていくということでございます。役に立つかは分かりませんが、こんな事例が学生から報告されたことを覚えています。

さて、最後に、協働事業で何かをみんなで声かけてやろうよとなった場合に、ぜひとも守ってほしいのは、出入り自由、行政に雇われて事業をやっているわけではありませんので、義務ではありません。面白くないや、続けられないと思ったら辞めていいというグループで

あってもらいたい。つまり、楽しさややりがい、到達感、達成感、そういったものがあって、続いていく。そして、色々な事情で、出来ないときには抜けられる、そういう形が大事だと私は思っています。時間がきましたので、最後に一言だけ申し上げます、今、日本中の市町村は消滅自治体論というものと直面しています。このままでは、大体895の市町村が消滅すると言われていています。消滅が嫌だったら、政府の交付金を受け取って、人口を増やし、よそから人口を呼び込んで、この人口減少を止めろ、ということで大騒ぎしています。このように全国の自治体がうちの自治体に来てくれませんか、うちにくれば良いことありますよ、というのは結局は人口の奪い合いなので、決してみんなが勝者になることはできません。ましてや、全人口が減っていますので、おそらく全体が敗北者になるはずだと、みています。そうではなくて、私は、自分たちが住みよいと思って住み続けている人が多い、そしてそこで住み続けながら、生き生きと毎日活動している、そのようなことが外から見えた時に、初めて外から人が移り住んでくる、ということがあり得ると思っています。今日はこれから事例報告がありますが、そのような報告に盛り込まれている豊かさ、人々がここで暮らしている満足感といったものを、ぜひともみなさんが外に発信していただいて、あるいは、この町の人たちにも話していただいて、共有を広げていってほしい、というふうに思います。どうもありがとうございます。

(司会・島崎) 辻山講師ありがとうございました。今後の町の協働の在り方について大変ためになる講演で、協働のまちづくりの参考にさせていただきたいと思います。また、「地域のことは地域で」というお言葉、「住民にできることは住民で」ではなく、「住民がやりたいことを行政に提案すること」が協働だということがわかりました。貴重なご講演、誠にありがとうございました。ここで一旦、10分間の休憩といたします。トイレの場所は、確認ですが、後方の出口を出ていただいて、右側奥にあります。廊下に出ていただいて奥にあります。また、1階にもありますので、ご利用ください。喫煙所はホールの外に出ていただいて、左にあります。1階の入り口付近にもあります。次の協働事例発表は11時10分からスタートしますので、よろしくお祈いします。それでは休憩に入りたいと思います。

<休憩>

協働事例発表及び講師総評

(司会・島崎) それでは、時間になりましたので、これより瑞穂町協働のまちづくり推進委員会による協働事例発表に移りたいと思います。推進委員をAチームBチームと2グループにわけて、これから2つの協働事例発表を行います。はじめに、Aチームの講演で、野本さんよろしくお祈いします。

<Aチーム発表>

(野本) みなさん、こんにちは。私はNPO法人つくしの野本です。「サロン活動で笑顔の瑞穂町を」をテーマに、今なぜ、サロン活動は良いのかをより多くの方に知っていただきたく、1年間かけてAチームでまとめてきました。また、町で行っている各サロンに足を運び、アンケート調査をしました。後ろのパネルには、その集計をまとめたものを掲示しておりますので、後ほど目を通していただけたらと思います。それでは、私の体験談を含めて発表をお聞きください。



サロン活動を知ったきっかけですが、社会福祉協議会の職員の方より、つくしもNPO法人だから、サロン活動をしてみませんか？と声をかけられました。サロン活動と言っても、どのようなことをしているかも分かりませんでした。説明を聞いているうちに、私が子どもの頃によく見ていた風景が頭に浮かびました。それは、近所の方々が我が家に来て、楽しそうにお茶や漬物、手作りの惣菜やお菓子など持ってきては、

にぎやかに話していた事を思い出したのです。そのような、環境で育った事もあり、違和感なく、サロン活動してみたいと思いました。実際にサロン活動をしたと思ったのは、ある日、高齢の男性の方がつくしの事務所のドアを開けて「何か自分に出来る仕事はありますか？」と尋ねてきたのです。仕事柄、事務所にはヘルパーさんが常に出入りしているのを見て声をかけられたのだと思います。「ここは、訪問介護事業所なので、利用者様のお宅を訪問して、掃除をしたり、料理や買い物等のお仕事をさせていただいているので、ここではお願いできる仕事は無いのですよ」と、答えました。その時、事務所にいたヘルパーさんが「シルバー人材センターに聞いてみるといいですよ。」と、話をすると帰って行かれました。それから、一ヶ月ほどしてその方が孤独死されておられた事を聞いたのです。今まで、一生懸命働いてこられた方が、高齢になり、行くところも無く、寂しく亡くなられたことを思うと、1日でも1回でも多く笑顔で過ごせるそんな場所があるといいのと思う気持ちが強くなりました。あそこに行けば常に誰かがいて、お茶のみしながら、たわいもない話が出来きるそんな場所があったら、あの男性も孤独死をすることなどなかったのかもと思うようになりました。

何かできることはないかと考えていた時に、つくしの事務所の相談室が午前中空いているので、ご近所の方に来てもらえるサロンを開けたらと思いついたのです。事務所に来たヘルパーさんたちに相談をすると「いいですね！サロンをやしましょう」と、大賛成してくれたのです。そしてボランティアセンターの職員の方に相談したところ、「いいじゃないですか！」と、言ってくださり、善は急げとなり、あれよあれよと言う間に「つくしサロン」と名前まで入ったチラシを作って持ってきてくださいました。おまけに、つくし事務所の近所にチラシを配ってくださいました。最初はどうか？何をしようかと悩み、最初はお茶でも飲んでおしゃべりでもと思っていたのですが、ボランティアセンターの職員の方が全面的にバ

ックアップしてくださいました。内容は、ボールを使ったストレッチ、ラジオ体操、みんなで歌を唄ったり、かるたをしたり など、盛りだくさんでした。最初は少なかった参加人数でしたが、来てくださる参加者さんからの口コミもあって、あの場所でこんな素敵なサロンをやっていると近所の方々に広まり、少しずつ来てくださる方が増えてきました。

サロンを開いている事を知った方より、こんなアドバイスも頂きました。高齢になると、病院などに行く以外に予定が少なくなって、外に出かける事も減ってしまう。そこで、カレンダーにサロンに行く予定日を書き込むことで、その日はサロンに行くという目的が出来るため、カレンダーなどを配るのはどうかとアドバイスをもらいました。早速、ボランティアセンターに相談してみたところ、卓上に置けるかわいいイラストの入ったカレンダーの情報を送ってくださいました。サロンに来られたときに皆さんに予定を書き込んで頂き、自宅のテーブルの上に置いていただく事にしました。サロンに参加された方の声や様子ですが、若い時には、友達が遠くに居ても良かったですが、歳をとったら近くに友達が欲しいと話されていました。若いときは遠くに出かける事を何とも思わなかったのに、足腰が弱くなると出かける事も億劫になり、家の中で過ごす事が多く、これから先の事を考えると気が滅入ってしまうなど、出かけることもしなくなると、マイナスなことも考えてしまいがちです。つくしサロンにはご自分でシルバーカーを押して来てくれる94歳の方がいます。最初は、息子さんに勧められてつくしサロンに来られたのですが、行ってみたら知らない人ばかりで「あそこは私の行くところではない！」と言い、しばらくお顔が見えませんでした。息子さんはお母さんに、「これから毎日、テレビを見て外にも出ないで過ごすのかい？ 最初は知らない人でも行っているうちに顔見知りなるのだから行ったほうが良いよ」と、家族で説得をしたところ、「母がまた、つくしサロンに行きますのでよろしくお願いします」と連絡がありました。それから、つくしサロンに息子さんやお嫁さんが送って来られるようになりました。そんなある日、他の方がつくしサロンに来るのが少し遅くなった時に「今日はみんな遅いね」と、言ってイスに座り、後から来た人達に「おはよう、今日は遅かったね」と、声を掛けておられる姿を目にしました。つくしサロンにも慣れ、自然に自分から声を掛けられるようになり、現在は、元気よくシルバーカーを押して、一人で来ておられます。ご本人も、「ここに来て、みんなと話をしてお茶を飲んで楽しい」と、明るい表情で話している姿をみて、心が温まり本当につくしサロンを開いて良かったと思いました。

もう一つ体験談をお聞きください。家族の介護をしている方も、サロンに来ておられます。ご主人の介護が必要になり、初めての介護で、この先どうしたらよいか、不安でいっぱいの方がサロンに来て、介護の悩みを話していました。すると、ご自分もご主人の介護をされている方が「私もそうだったわ」と、答えると「ご主人の介護をしているのは自分だけでは無いんだ」と、気持ちの切り替えが出来たり、また、サロンで知り合いになった人同士が、お互いに困ったときに助け合ったりと、人との繋がりが広がっているように感じます。つくしサロンの活動の日は、事務所の隣の相談室から、皆さんの楽しそうな笑い声が聞こえてきます。その笑い声を聞いたたびに、幼い時に日々、縁側に近所の方が集まって、にぎやかに話をしていたことを思い出しながら、「つくしサロン」ができて本当に良かったと思っています。若いうちは、体調を崩したり、気持ちが落ち込んだりしても、すぐに回復して元の生活に戻

ることが出来ますが、高齢になって体力が低下すると外出が億劫になって家から出なくなり、引きこもる原因になることもあります。そのような時には、サロンに参加してみんなで身体を動かしたり、話をしたり、お茶を飲んだりすることで、いろいろな人と交流が持てることが楽しみになって、次のサロンにも行ってみようと思ってもらえるようになっていけたらと思います。大勢の人が参加できるサロンも増えていけば良いと思いますが、瑞穂町のあちらこちらに、歩いて行けるところに、小さなサロンが出来て、お互いに顔見知りになり、人との繋がりが広がっていけば、より素敵な町になると思います。

それでは、実際にサロンで行っている活動の一つを皆さんと共にやってみたいと思います。箱根ヶ崎西会館にて開催している、ひなたぼっこサロンの皆さんです。いつもサロンで大正琴に合わせて歌を唄っています。今日もこの素敵な大正琴の音色に合わせて、この会場にいるみなさんと一緒に歌を唄いたいと思います。歌う曲は先ほど受付にて、お配りしました水色のA5サイズ用紙に書いてあります「ふるさと」と「荒城の月」の2曲です。

<大正琴演奏>



(野本) 大正琴の皆さんありがとうございました。大正琴の素敵な音色と皆さんの素敵な声のハーモニーをありがとうございました。これで、私からの発表を終わりますが、今回このフォーラム開催においてご協力していただきました、各サロンの皆さま、また関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(司会・島崎) 野本さん、ありがとうございました。また、大正琴の演奏にご協力いただいた皆さま、どうもありがとうございました。それでは、限られた時間ではございますが、お一人もしくはお二人程、ご質問がある方は挙手をいただければ、お受けしたいと思います、どなたかいらっしゃいますでしょうか。

(質問者) 先程のご講演ありがとうございました。実はですね、後ろのサロンのアンケート

を見ていましたら、いくつか気になることがありましたので、2点ばかり質問させていただきます。1点は、子育てサロンのほうなんですけど、お年寄りとみなさんがやっているサロンに子どもを連れて参加出来たら嬉しいなというような内容の意見がありました。私も、年寄りとかある年齢を超えた人たちだけではなくて、小さいお子さんも一緒に参加できるようなサロンがあったら、なんてちょっと考えたもので、その辺はどうお考えなのか、というのが1点目です。

もうひとつは、サロンに参加されている方が、八百屋さんに行き物に行くのと違って、サロンに行くときは、ちょっと口紅を軽くつけて参加する、なんていう意見が書いてあったんですね。その気持ちってとても大切だなと思って、参加者をご覧になっていて、どうお考えになっているかというのを聞かせていただけたら嬉しいと思って質問いたしました。

(野本) 只今の質問なんですけど、核家族の方が増えていますので、おじいちゃんおばあちゃんと接する機会が少なくなっていると思うんですね。だから、サロンにも子どもを連れて、高齢者サロンにも参加していただくのはとても良いことだと思います。ひなたぼっこサロンに障がいをもった子どもが学校帰りに寄っていただいた事があるんですけど、そういう人たちとの関わりもこれから考えて、みなさんで受け入れて交流ができるサロンができていけばいいと思います。

口紅をつけてサロンに行くっていうのは、外に出るときに化粧はしていなくても、口紅ひとつつけることで気持ちが明るくなっていくと思うので、ぜひいろんなサロンで皆さんに一言かけて、綺麗になって明るくなって良いサロンになるんじゃないかなと思います。

(司会・島崎) それでは次の発表に移りたいと思います。Bチームの準備がありますので、少々お待ちください。

準備ができましたので、Bチームの講演に入りたいと思います。中沢さん、よろしくお願ひします。

<Bチーム発表、パワーポイントを使用>

(中沢) みなさん、こんにちは。協働のまちづくり推進委員のBチームを代表しまして、本日20分から30分ほどお話をさせていただきます、中沢清と申します、よろしくお願ひします。私は瑞穂町の南平在住でマウンテンバイクを中心としたサイクルショップを中沢ジムという名前で経営しているんですが、私は瑞穂町に好きで引っ越してきた町なんですね。もともとは足立区出身なんですけども、なんで好きかという、30年前ぐらいからマウンテンバイクに乗ってまして、奥多摩に行ったり青梅に行ったり、色々なところに行っただんですけど、一番好きなのは狭山丘陵なんです。狭山丘陵が大好きで、ここで自転車が乗れなくなってしまうたら、わざわざ越してきた意味がなくなってしまうんです。どこか引っ越さなければいけなくなってしまう。日頃、私は自転車に乗って町をいろいろ回っていますと、瑞穂町

には楽しいところがいっぱいあります。例えば、昨日オープンしたところと言えば、さやま花多来里の郷です、行かれた方もおられると思います。まだ、花多来里これからが本場だと思うんですけど。



こちらの画面にある郷土資料館、けやき館なのですが、こちらに入りますと、バーズアイといって、床一面に瑞穂町を中心とした地図があるんですね。子どもたちを連れていくと、自分の家を探したりするんですけども。瑞穂町は緑の島が点在している町なんです、どうしても車に乗っていたり電車で移動したりすると、なかなか気づかないんですけど、歩いてみたり自転車で移動すると、非常に小さな林があったり、森があったり、身近な自然がある町だと思っています。

私は、子どもたち向けにボランティアセンターみずほと共催して、サイクリングをやっています。サイクリングをやっている団体は私が代表を務めています、西多摩マウンテンバイク友の会という団体で、4月から6年目になります。この団体が何をしているかと言うと、マンテンバイカーが集まって、自分たちが遊ばせてもらっている地域のお手伝いをしようと、ただ走るだけではなくて、いろいろなお手伝いをしようということで、西多摩全域で里地里山の再生活動だとか、地域活動を行っています。その中で、子どもたち向けに、自然を知っていただきたい、自転車で走ってみて、いろんなところを回ってみようという企画で瑞穂町を回る町探検というのがあるんですね。自転車で町探検の中で、目玉となっているのが、これから紹介します、岩蔵街道北部の平地林で、この平地林に子どもたちと入ると、みんな驚くんですね。こんな近いところに、まっすぐ1kmぐらい進む森があって、神秘的でこんなところ見たことないという意見がでます。また、子どもだけでなく、障がいを持たれている方とかも自転車乗れる方は連れて行ったりすると、この場所で何かやりたいという声があがるんですね。自転車で横切っていくと、ごみがかなり落ちていたりして、ごみを拾ってみたいという声があがっていて、友の会を通してごみ拾いを初めとして、お手伝いができないものかなと考えていたところ、協働推進委員会の前身であります、協働を考える会に声を掛けていただいて、協働の仕組みを教えていただく中で、岩蔵街道のところの森で何かできないかという思いが3年前からありました。見ていただくと、町に残された緑、緑というのはどんどん開発されてなくなってしまおうんです。保護される場所もあるんですけど、平地のここだと大抵何かに使えるので、なくなってしまおうんですね。できれば平地で誰でも来れるような身近な自然を守り、生かして楽しむことはできないかと、協働推進委員Bチームとお話をして、私の方からプレゼンさせてもらって、現場を見に行ったら、これはぜひやってみようということで、子どもにとっては新鮮な場所、大人にとっては懐かしさ、お年寄りや障がい者の方も一緒になって、何かをやろう、落ち葉掃きでもいいですし、草刈りでもいいですし、みんなが集まれる場所ができるんじゃないかという可能性を感じました。その可能

性を感じて、なぜその可能性があるかという、遊びなんですね。遊びの中から関わられるボランティア活動ではないかと、私は感じました。確信してしまっていて、なぜかという、西多摩マウンテンバイク友の会は5年間の経験で、会員数が増えていって、もともと地元の人間でやっていたのが、今では都内だけでなく、埼玉県、千葉県、山梨県で260人の会員がいて、毎週のように西多摩の各地で色々活動しています。そこで感じたことは、使命感をもって、やってしまうとなかなか長続きしないというのが経験であります。もちろん、使命感を持つのは大事なんですけど、使命感だけあると、辻山先生の話にあったように、忙しくなると来れないとか、疲れているとか、そういう時に後ろめたさが出てしまったり、次回、行きにくくなってしまいうことが出てしまう。すごく真面目な人とか、使命感を持ってしまいう人なんですね、持つ分にはいいんですが、ただ大事なのは、遊び心、面白がっちゃうというのが大事だと思うんですね。時間に余裕があったり、気持ちに余裕がないと、なかなかボランティアができない。逆にできなくなった時は、ボランティアしなくていいと思います。時間が出来た時にやってみよう、それが継続性につながるのかなと思います。大事にしているのは、面白み、楽しめる要素をとということで、マウンテンバイク友の会は活動しています。

そこで、瑞穂町から離れてしまうんですけど、どういう形でボランティア活動を進めて、実際良い形に進んできているかという事例を紹介したいと思います。2つの活動から発表したいと思います、「菅生の森づくり協議会、緑の再生プロジェクト」、「五日市深沢地区郷土の恵みの森づくり」こちらの紹介をしたいと思います。ボランティアをどうやってしようかとした時に、いきなりやろうとしてもできないんですね、どういうことから始めたかという、町の広報とかを見ると、ごみ拾いとかの募集があったりするんですね。そこでごみ拾いに行ってみようということで、自転車に乗ってごみ拾いをしにいったら、感じたことは、誰もが思っている事なんですけども、きれいな町がみんな好きなんですね、綺麗にしていこうという姿勢、例えば一緒に歩きながらごみを拾うので、その時に会話が出るんですよね、それが交流のきっかけとなります。そして、あきる野でやっているんですけど、ごみ拾いした後に、みんなで自治会館等にごみを集めた後は、お花を植えるんですね、花を植えると綺麗になるだけでなく、次にまたお花を見に来ようという気持ちになるんですね。私は花の事はよくわからないんですが、ただ花は綺麗でいいなと、そのくらいの程度なんですけど、そういったところには、遊び心があるのかなと思います。ごみ拾いから関係ができてきた上で、実際に菅生で人が手をかけることで維持されている里山がありまして、現実はお年寄りが多くなってしまうので、手が入っていない状態なので、お手伝いをしないといけない。

ひとつは、「郷土の恵みの森づくり」というのは、あきる野市が各町内会に自然を生かした形で人が来る仕組みをつくらう、みんなに知らないものを知ってもらうために、道を整備したり、森を綺麗にしようという構想がありまして、その中の一環で、あきる野五日市の深沢地区の活動をしております。樹齢1000年の木なんですけど、地元の人でも知らなかった場所にあり、これをみんなの力で見てもらえるように、なおかつ自然の形を生かしてやろうということで、道づくりをしたり、環境整備をして、今では多くの方が訪ねるようになりました。それから、あじさい山というのが有名なんですね、あじさいがたくさん咲いているところなんですけども、そちらの整備もします。私たちは整備するだけでなく、サイクリングしに行

ったり、自転車に乗るのが私たちの趣味なので。活動するにあたっては道具が必要になるので、ボランティアセンターみずほに指導していただきながら助成金を東京都からいただいて、道具を全部買ったんですね。そうすると、手ぶらで現場に出て、自分たちの遊びのスタイルをもちながら、お手伝いができる。気軽に入っていける形ですね、私たちはワークアンドライドと言って、働きながら自転車も乗って楽しんで、道具なんかは友の会でもっていて、あとは地域の方に指導していただけるという、人が手をかけることによって森が元気になるだけではなく、実は人が元気になるんですね。自然の中に入って、会話をしながら汗をかくと、ただ仕事ではないので1日中は作業しないのです、2時間ぐらい作業します。これが協働のポイントかなと思うんですけど、仕事ではないので長い時間作業するのではなくて、出来る範囲で、2時間ぐらいにし、もっとできたよというような気持ちで帰ったほうが、いいのかなと思っています。

次に、「緑の再生プロジェクト」は菅生のほうでやっているんですが、NPOの地元の団体から指示をいただきながら、森全体を整備しています。こちらは菅生高校のそばなんですけど、子どもたちと一緒に親子で、草刈り体験をし、綺麗になった後はみんなで歩いてみようとか。なんで道を綺麗にしているかという、地元の方が大事にしている神社がありまして、その神社の奥のほうまで道がなくなっていたので、みんなで繋ごうとすると、地元の方も喜ぶますし、お年寄りとも昔話などで会話ができるんですね。私たちにとっては珍しいものなので、非常に楽しいです。帰りに食べ物をいただいたり、場合によっては山で採れたものをいただいたり、そういった楽しみもある場所です。世代を超えて、こういった活動ができるかなと、実際に山の活動に詳しいのは70代の方が多いんですね。貴重な話も聞けて、僕らは引き継いでいかなければいけないなという思いがあって、その先に、子どもたちにも伝えていきたいなという思いがあります。実際に住んではいないんですけど、定期的に活動で通うことで、地元の方が受け入れてくれます。地元を受け入れ体制ができることが1番大きなことだと思います、地元だけでまわすのは非常に難しいと思うので、多くの方が受け入れられるように。ただ、誰でも受け入れられないので、それをコーディネートする人が必要かなと思っています。その結果、山学校による地域活性化事業というのに、私たちお手伝いすることになりました。企業、学校、地域が一体となって、自分たちの住んでいる地域を盛り上げていこうというので、実際に農業支援をしたりとか、荒れてしまった隣地を綺麗にしたりしています。私たち、残土でできた山の上に、残土の周りの森を整備しながら、人が集まれる場所をつくりました。地元の方から、マウンテンバイクが毎週のように何十人もきているんだから、遊ぶ場所でも作ったらと言われてまして、みんなで草刈りをしてコースを作り、桜の木を植えました。地元の方もここに来て楽しんでいただけるような形になっています。あとは、子どもたちが自転車の安全コースをやって、親からすると場があるだけですがごく良いと、普通の道ではできないので、こういうところで参加する子どもたちが増えていきます。実際に見守る大人がいたり、食べ物を作って提供する人がいたり、森の話をする人がいたり、多様な方が集まれる場ができております。その結果、野外活動から生まれる世代間交流や地域交流、一緒に里山を整備することで環境作り、みんなで喜びをもてる、未来の話ができる、このようなことをするために受け入れてくれる地域があることが非常に大事です。

道具の使い方を学んだり、花の話、地元の方の話、縁側に呼ばれて何かおいしいものを食べたり、逆に私たちが飲み物とかをもっていったり、というような交流、この中から住んでしまう人がいるんですね。都心に住んでいたけれど、仕事があるけれど、通える範囲だから住んじゃおうとか、リタイアしたら住もうとか、週末に通う人が出てきます。

そこで話を戻しますと、平地林における協働で岩蔵街道北部、ここはまっすぐ林が広がっています。それがほとんど民地なんです、あとはJRが土地を持っているんですけど、ここをなんとかしたいと、なぜかという、平地林は東京都随一なんです、凄く広い森です。なおかつ、色々な生き物が生息しています、とても貴重なものだと思います。なくしてしまったら絶対に戻すことができないので、なんとか協働を通して平地林を守って瑞穂のシンボルにしていきたいなと思っております。そこで作ったテーマが「みんなで楽しむ平地林づくり」ということになります。どうすることが協働かという、企画立案は推進委員が行いまして、地権者の方へのコーディネート、これは私が行ったところで話してもらえないので、これは役場の地域課建設課にお願いしました。今まで調査されたり、守ってこられた瑞穂町自然科学同好会への橋渡しを地域課の方がつくってくれました。落ちているごみに関しては環境課に指導いただきながら、実際の現場の作業は推進委員会と役場職員と一緒に行いました。現実に行った作業ですが、昨年から3月まで5回の活動を実施しまして、平地林全て活動したわけではなく、町の保存樹林に指定されたところで、もともと手を入れられていたところで、手が入られなくなってしまって、うっそうとしているところをモデルケースとして、今回のフォーラムに向けて作業いたしました。まずは、下草刈り、低木伐採で、明るい平地を作りました、切った木は集めておくと堆肥になったり、虫や小さな動物が逃げてきて、といったように隠れ家になっている場所を作ってきました。たくさん活動していく中で、ある程度の草木がたまってきたら、落ち葉だめを作って堆肥になって森に返せると、こういうようなものがあると雰囲気もいいんです、達成感もあります。それからごみも拾いました、残念なのは民地で地権者の方がいる場所のごみは持って帰ることができないので、町道にあるごみをみんなで拾いました。環境課の職員の方が分別方法とか様々なごみの話で知恵をいただき、教わりながらごみ拾いを行いました。ごみが落ちてると、ごみを呼ぶんですね、あとはうっそうとしている林には、どうしてもごみが捨てられていたりします。でも、人が手入れをしているところには、ごみが落ちてないんですね。あとは、うっそうとしているところは犯罪を呼び込んでしまうような可能性もあります。集めたごみはみずほリサイクルプラザにて焼却しました、これは廃棄物の減免申請をしまして、町の道ということで受け入れていただきました。できれば今後は、民地のごみもどこかから助成をいただいたりしながら、処分できたらなと思っております。

「みんなで楽しむ平地林づくり」では、場が綺麗になって、花のことはわからないんですが、花は好きで、自然科学同好会の方から教わったんですけど、うぐいすかぐらというお花で、群生しています。ただ綺麗だけでは、良いというわけではなくて、生き物にとってはうっそうとしている場所も大事だったりするので、そこらへんのバランスを地域の詳しい方に聞きながら、調査をしながら、事業の計画を立てて、整備をしていきたいなと思っております。

最後、私が考えた文章なんですけど、東京都でここまで大きな平地の林は他にないものです。この身近にある様々な生き物や植物が生息している平地林を町民や瑞穂町を訪れる人たちの手で守り、残していきたいと考えております。そしてそれは自然を通して人々が繋がることができる場、瑞穂町の貴重な財産であると考えております。継続的な活動をする事で、この場だけでなく、町に愛着が湧いたり、町の良さを再確認できることかと思えます。例えば、住んでいる人間からすると住み続けよう、都会に出ていくのではなく、小さなところで見つけていく、それを伝えていく人も必要なんですけど、町の役割としては、地権者との交渉、広報活動等を行っていただいて、ボランティア団体は現場を調査したり継続的な作業をしていく。上手にエコツアー的なものをしたり環境教育の場にしたいたいと、近くに老人ホームなどもあります、そういった方たちが自然を感じてもらえたら良いなと思っています。ボランティアセンターでお手伝いさせていただいた時に聞いた話は、障がいを持っている方たちはみんなと同じ場所に出てみたいという声をすごく聞きます。例えば、平地林に来て草を2本しか取れなくてもいいんですね、30本取る人は取る、1日中作業できる人は作業していいと思うんですね。とにかく私が考えているのは、瑞穂町でみんなが集まれる場をつかって、それぞれできることをやる。それぞれ繋がっていくことができる、それが自然の中だと遊び心や楽しい気持ちが最終的に豊かな心になっていくのではないかなと考えています。3月まで、保存樹林地で活動したんですが、4月からは新たな団体をつかって、ボランティア活動を続けていきたいと考えております。その後、役場の窓口で協働事業として、これができるかどうかは役場のジャッジになるかと思うんですけど、できれが町と町民と一体となって、東京で他にはない自然を残していきたいなと考えております。協働のBチームのみなさんには、ごみ拾いを手伝ってもらったり、また、意見をいただいたりして、ありがたいですし、地域の方をはじめ職員の方が受け入れてくれた結果があって、その熱が地権者の方に伝わって、じゃあやってみようとなったわけです。大事なのは熱で、熱を生むのは、人と人のつながりであったり思いだと思うので、ぜひ協働のまちづくりという瑞穂町のテーマを生かして、財産である平地林を守り、次世代につなげていきたいなと考えております。細かな説明は後ろのブースでお話しますので、もし活動に参加してみたい方はお気軽に声をかけていただければと思います。ゆっくり話ができますし、資料もありますので、ぜひブースの方にいらしてください。今日はBチームの発表をお聞きいただきまして、誠にありがとうございました。

(司会・島崎) 中沢さん、ありがとうございました。それでは限られた時間ではありますが、ご質問のある方はお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

(質問者) いいお話ありがとうございました。今のお話と瑞穂町役場やっている回廊計画で格差があるのではないかと思います。回廊計画は役所が中心で、協働で良いことをやっているわけですね。全然結びついてない、というのが今の瑞穂町の実態ではないのかなと解釈しました。

(中沢) 私は回廊計画のルート部会をしまして、言われた通り、けっこう先に進むことが多くて、もう少し聞いてもらえるとおもしろいアイデアがある。大事なのは、自分たちが声をあげることだと思っているんですね。どこであげていいのかは、役場に行って、とりあえず声をかけてみて、受け入れてくれる役場だと思っていますので、やはり自分たちが住んでいる町だから自分たちで出ていくしかない、新しく変えていくしかないと感じています。非常に財産があって、多くの方の声を集める人がいて、繋ぐ人が必要なのではないかと考えています。

(司会・島崎) それでは質問のほう、よろしいでしょうか。
続きまして、辻山講師から総評をいただきたいと思います。全体を通してご意見をお願いします。

(辻山講師) 大変おもしろく、充実した報告を受けて感銘を受けています。Aチームの方は、おそらく練習されてきた演奏と歌とを、どういうふうにつなげていこうかと準備と打合せを想像できました。Bチームは、パワーポイントにまとめてくる、操作していた方も企画に参加して一緒に知恵をしぼり、写真を集めたりしながら、練習打合せにおいて、繋がるというのがあって、私は1時間喋ろうが2時間喋ろうが1人で考えているんです。講演の内容についても一緒に作っていく仲間をつくったほうがいいなと感じました。

それから、個別的な話をしますと、福祉サロンの話を聞きながら思ったことは、直接行政との関係については語られなかったけれど、私は凄いなと思いました。何が凄いかというと、人と繋がるということを経験できるお年寄り、あるいは自分が参加して動いているお年寄りは病気になりません、健康です。ということは介護保険会計も国民保健会計も楽なはずです。これからは、生きがいとかを多く語られるけれど、財政のためになるんだということを感じまして、大切なことだと思いました。そのことの一端が、ちょっと口紅をさして出るという外出感というか、言ってみれば日常生活とは違う時間を設ける緊張感、この緊張感が体にいいかというのを含めて、うらやましいなと思います。

さて、平地林のお話で、そもそもマウンテンバイクの同好会のような人たちが各地での活動に参加されてきている。報告の中にありました、日頃遊ばせてもらっている自然に恩返し、というのは非常にわかりやすく、そこに自然が温存されていくことが遊びを豊かなものにしてきている。それがきっかけでいろんなことに取り組んできた。しかもそれが、マウンテンバイクを捨てて自然の回復に力を注ぐといっているのではなく、遊びながらと言っていたのがとても印象に残りました。最後に一言申し上げますが、今私たちの国の政治学会という領域ではテーマがだんだん絞られてきました。最大のテーマは、政治学の共通テーマは「つながる」という4文字です。これは政治学か、と思うんですけど。今日の報告の中心は、まさしく「つながる」ということでしたね。テーマは協働ですから、行政と人々の活動などがつながるだけでなく、団体同士がつながり、また地元の人や地権者の方とのつながりを増やしていく。そのことの一端に行政もつながっていくという絵が見えて、私は大変勉強になりました。どうもありがとうございました。

(司会・島崎) 辻山講師貴重なご意見、ありがとうございました。これで、本日予定していた講演は全て終了となります。基調講演及び事例発表者に今一度、拍手をお願いします。

本日は、皆様お忙しいところ、お集まりいただき、誠にありがとうございました。いかがでしたでしょうか。協働のまちづくりについて少しでも、ご理解いただき、そして一緒に考えていただければと思っております。また、お手元の資料の中にアンケートがございますので、ご協力をお願いします。お帰りの際にアンケートは箱に入れていただき、鉛筆の返却をお願いします。最後に、協働のまちづくり推進委員会の委員を紹介させていただきます。委員のみなさま、前にお集まりください。

<委員整列>



(司会・島崎) この後も、ホール後方には協働事例のブースを用意しており、各委員がお待ちしておりますので、ぜひお立ち寄りください。本日の講演の内容や協働事例についてのご質問など、お気軽にお問い合わせください。

それでは、以上をもちまして、「瑞穂町協働フォーラム2016」を終了させていただきます。ありがとうございました。

アンケート集計結果

1. どのように今回のフォーラムをお知りになりましたか

・フォーラムちらし	16
・広報みずほ	8
・瑞穂町ホームページ	2
・友人・知人からの紹介	16
・その他	5 (ボランティアセンター加入時など)

2. ご参加いただいた理由をお教えてください

・基調講演や協働事例発表のテーマに興味があった	20
・協働について知りたかった	14
・友人・知人からの紹介	10
・講師・事例発表者に興味があった	10
・参加費が無料	1
・その他	2

3. フォーラム全体の時間はどうでしたか

・適当	38
・長い	1
・短い	1

4. 開催時間帯はいつがよろしいですか

・平日昼間	3
・平日夜間	4
・休日昼間	38
・休日夜間	2

5. 良かったと感じられた内容をお教えてください

・基調講演の内容	32
・協働事例紹介の内容	33
・協働事例の掲示物	24
・参加費が無料	9
・その他	1

6. 自由回答欄：何か町とやってみたい事、瑞穂町をこういう町にしてみたい等

- ・町民ではないですが、たびたび訪れたい町になってもらいたいと思います。
- ・瑞穂町ではまだまだ遠い話であると感じた。住民が自治する地域にしていくために人材の養成が必要。役所の意識改革、「おかみ」ではない。職員は給料をもらっているという事を忘れるな。
- ・瑞穂町に住んでいませんが（練馬在住）、マウンテンバイク友の会を通じて、週末にボランティア活動をしに、こちらに良く来ています。自然が豊かで人も良く、大切にしていきたいと考えています。外部からの人の受け入れも、どんどんしていつてもらいたいと思います。また、新しい風をどんどん取り入れて良い町作りをしてほしいと思います。公共事業で建物を作るのではなく、自然を大切にしたい町作りをお願いしたいです。いずれ住めたらと考えています。そのためにも、若い人の考えもどんどん取り入れてもらえたらと思います。
- ・誰もが気軽に参加でき、楽しみながら結果が完了している事業、企画、集まりがたくさん開催されると良いと思います。
- ・Bチームの活動に感心を持てた。良い話が聞けて、フォーラムに来て良かったです。
- ・関係者（発表者）以外にもっと多くの方が参加できると、もっといいなと思います。
- ・協働するには仲間が必要。Aチームはつくしのヘルパーさん達。Bチームはマウンテンバイク友の会の方々。子どもの為に何かできないか？と考えた時間でした。
(子ども食堂やってみたいと思いました。さて、誰に相談すれば良いでしょうか？)
- ・歩きやすい道路（車いす、ベビーカー等）明るい道。
気軽に立ち寄れる、まちかどいこいの様な所を増やしてほしい。
- ・もっと宣伝して、たくさんの方がこられますように。
- ・基調講演はとてもわかりやすくて、良かったです。事例発表も驚きました。こんなに町民が活躍している瑞穂町は素晴らしいと思います。
- ・参加者の構成（年齢等）を調査すると、今後役に立つのではないかと。
(特に若者の参加を促すなど)
- ・このような活動は素晴らしいと思います。町がしっかりと支援していく体制を考えていくべきだと思います。

- ・高齢者の増加、若者の減少につけ、活力を生み出し笑顔で日々過ごせる町づくりと思い、” 活気と笑顔の町づくり” 人口増加につながる企業をこの町に誘致してはと考えます。
- ・高齢者が肩身がせまい思いのない様な町にしてほしいです。
- ・町民に対するPRをこまめに行った方が良くと思います。
- ・平地林の保全、豊かな緑を残す。気持ちよく自転車散歩できる街。
- ・自分は楽しんでボランティア参加していますが、街の再生継続には、やはりうまく民間のお金をからめる方がいいかと。今から原始共同体には戻せないのですから。